

初めて知った母の気持ち

中谷 恵なかや めぐみ

最近、私は母とよくけんかをする。また今日も、いらだちとくやしさと情けなさで、二階に上がってきたしまった。家族四人で楽しく夕飯を食べていたのに、台無しにしてしまった。自分が悪いということは、いやなくらい分かっている。でも、心のどこかでは、「うるさいなあ。」と思っている自分がある。そして結局、素直になれずにふてくされてしまうのである。

母は、普段はとても優しくおもしろい人だ。けれど、あいさつや言葉づかい、食事のマナーなどにはすごく厳しい。また、何事にも一生けん命な人だ。仕事から帰ってくると疲れた顔も見せずにてきばきと家事をこなし私や兄に勉強を教えてくれる。

私たち家族のために、自分の時間をおしんで働いてくれる母の口ぐせは、「一生けん命やりなさい。神様が見てるよ。」である。いつも長続きしないで途中であきらめてしまったり、ダラダラと時間を過ごしている私は、つい母とぶつかってけんかになってしまう。

そんなことが続いたある日、朝起きたら枕元に母からの手紙が置いてあった。「ゴミじやないよー。」と母の似顔絵が描いてあった。私の最近の様子のこと体のこと、そして、最後にこう書いてあった。

「——めぐのことを考える時、いつも申し訳ない気持ちでいっぱいです。めぐがいちばん母親の愛情を必要としている時に、仕事、仕事で全然いっしょにいてあげられなかった。夕飯も食べずてあげられなかった。お風呂にも入ってあげられなかった。母親としてなんにもしてあげられなかった。本当にごめんなさい。」

めぐは覚えてるかな？朝めぐと手をつないで歩く、あの幼稚園までの5分がお母さん宝物でした。

いつもうるさく言つてばかりでゴメンなさい。めぐには、将来、大好きな人やかわいい子供たちのために、一生けん命がんばることのできる人になって欲しいと思います。幸せになって欲しいと思います。——」

涙があふれて止まらなかつた。大きな声を出して泣きたかつた。私は、泣いている顔を家族に見られるのが恥ずかしくて、自分のベッドから出られなかつた。母の気持ちは痛いほど分かっていたはずなのに、母がこんなにもわたしのことを考えていてくれて、大切に思っていてくれたいたなんて……。すごくすごくうれしかった。

私は、一階に下りて、「ありがとう。」の代わりに母にぎゅっと抱きついた。母は、いつもの笑顔で「おはよう。」と言ってくれた。

これからは素直になれる気がした。